

新聞社運動部から見てきた 大相撲とサッカー事情

桜井章夫 (高32回)

2017年8月までの2年間、中日新聞東京本社（東京新聞）の運動部長を務めた。運動部はスポーツ全般を取材し、紙面を作っている。紙面は3月下旬から秋にかけてプロ野球とサッカーが中心の展開になるが、ここ数年は大相撲の人氣が高い。中日新聞が名古屋場所を日本相撲協会と共催していることもあり、他紙に比べて弊紙は大相撲にかなりの紙面を割ってきた。スポーツのうち、私自身はサッカーが最も好きなのだが、各世代を通じて関心が高い大相撲を最初に取り上げる。

建立100年の相撲記者碑

大相撲とマスコミ（主に新聞）の付き合いは長い。現在は新聞社がプロ野球やサッカーJリーグのチーム経営に関わっているが、取材相手との関係性でいえば大相撲が最長であり、濃密と言える。

が営まれた。その後、国技館内でパーティーが開催され、すでに協会を定年退職していた先代の東関親方（元関脇高見山）といった懐かしい人たちもいた。協会関係者以外は新聞社とテレビ局の記者、アナウンサー、そのOBばかりだった。

大相撲はほかのスポーツに比べ、フリーランスの記者が極めて少ない。記者クラブのメンバーでないと支度部屋に入って取材できないといった閉鎖的な状況だからだろう。女性を土俵に上げてよいかといった問題が取りざたされているが、開かれた大相撲という意味では記者クラブ制度も見直しの対象だと思っている。

チケット販売も改革を

最も改革を進めてほしいのは、本場所のチケット販売のあり方だ。本場所のチケットは約2か月前から売られだされる。家族で観戦に行こうと、発売初日午前10時からインターネットで申し込んでも、なかなかつながらない。つながつたときはすでに希望の席が売り切れている状態だ。とりわけ、両国国技館で開催される3場所はチケットが入手にくい。

大相撲人氣が高い裏付けでもあるが、インターネットで扱う一般販売の枚数が限られているからだと思う。東



●さくらい・あきお
飯田市大久保町出身。上智大学卒業。中日新聞東京本社で論説委員、放送芸能部長などを経て現在は技術局次長。横浜市在住。高校時代はサッカーチーム。いままも社会人サッカーチームでボールを蹴っている。

両国駅を出て南（国技館と反対側）に3分ほど歩くと、回向院えこういんという寺があり、境内に「力塚」が立つ。歴代の年寄（親方）を慰霊する碑で、その脇に「相撲記者碑」がある。相撲取材に功績のあった記者が物故した際に名前が刻まれる。1916年に「相撲の隆盛は全く筆の力である」と、相撲協会の雷権かみ太夫取締役（初代梅ヶ谷）が建立した。「記者碑」など世界的にみてもほかにない。これひとつとっても、両者の関係が深い証だろう。

2016年はこの記者碑建立から100年にあたり、現地で法要



両国の回向院境内に立つ力塚

京での3場所の場合、チケットはインターネットによる一般販売と「国技館サービス」による販売に分かれる。国技館サービスとは相撲茶屋のことだ。国技館の相撲茶屋は20軒あり、多くのチケットをさばいている。

一般販売で買えなければ相撲茶屋から買えばいいと言われるかもしれない。チケットがほしいのに入手できず、茶屋から購入したこともあった。ただ、茶屋のチケットは土産物付きとなっていて、高価なのだ。桝席A（4人分）の場合、一般販売は4万6800円だが、茶屋だとほぼ2倍の値段となる。

チケット販売の権益を茶屋が握っていることについて相撲協会は「長い歴史の中で大相撲はお茶屋さんに支えられた時代があった。チケットが売れないときにお茶屋さんがさばいてくれた」と伝統であることを強調する。一ファンとしては一般販売のほうにチケット枚数を増やす改革をしてほしい。

喬木村出身の高登

本場所を観戦していると、大阪であれば豪栄道や勢、名古屋なら長野県上松町出身で今年の同場所優勝した御嶽海、三重県出身の千代の国への声援が大きいのが体感できる。長野県出身力士といえば江戸時代に活躍した

雷電（現東御市出身）が有名だが、戦前に伊那谷から関脇まで昇進した力士がいる。番木村出身の高登たかのぼりである。1908（明治41）年生まれて、1933（昭和8）年から34年にかけて関脇を務め、大関昇進も期待されたが、膝を痛めて39年に引退した。

若いころ、近所の子供を肩車して天竜川を渡ったとか、飯田市の自転車大会に出場したとき、ペダルが壊れたが自転車を担いで走って優勝したというエピソードが残る。高登が活躍したことも影響してか、戦前は飯田下伊那では相撲の人氣が高く、小学校の校庭に土俵があったと父から聞いた。伊那谷出身の関取として高登をぜひ知ってほしい。

埼玉栄高校の相撲部

大相撲はモンゴル力士隆盛の時代から、若手力士が次々と台頭しており、群雄割拠の時代に変わりつつあるように感じる。

多くの若手を輩出しているのが埼玉栄高校（さいたま市）だ。さいたま支局長、運動部長と足掛け5年にわたり、同校の相撲部とかわった。幕内では豪栄道、貴景勝たかかげ、北勝富士ほくとふじ、妙義龍がOBだ。豪栄道のしこ名の栄は母校から、道は山田道紀監督からもらっている。

取り上げなかったのは、今年夏にロシアで開催されたワールドカップで日本代表が史上初のベスト8に進めなかったから。大会前の低い評価からすれば称賛される結果と言えるが、個人的にはがっかりした。

決勝トーナメントでベルギーに負けたとき、2006年のドイツ大会を取材した際のデットマール・クラマーさんの言葉を思い出した。ドイツ人のクラマーさんは日本サッカー界で初めての外国人コーチであり、1964年東京五輪を控えた日本代表を指導した人物である。その後、日本代表はメキシコ五輪で銅メダルを獲得するなど進歩を遂げ、クラマーさんは「日本サッカーの父」と呼ばれている。2015年9月、90歳で亡くなった。

ドイツ大会が始まる直前の06年5月30日、ドイツ対日本のテストマッチがドイツ・レバークーゼンであった。日本が2点先制したが、ドイツがセツ



ドイツW杯前にクラマーさんに取材

2018年初場所の優勝決定戦は、同校OB対決が2番もあった。十両で妙義龍と英乃海、序の口で塚原と琴手計ことてがひが対戦した。塚原と琴手計は入門したばかりの高校3年生だった。彼らの同期生には昭和の大横綱大鵬の孫、納谷もいる。納谷はやや遅れて大嶽部屋に入門した。



埼玉栄高校の祝勝会で豪栄道関と筆者

彼らが高校3年の時、同校の合宿所で一緒に食事をしたことがある。そのときに3人ともプロ志望と聞いたが、いずれもおとなしくてこれで大丈夫だろうかと心配した。その後、担当記者に聞くと同調に勝ち星を重ねているという。プロ野球やJリーグでもそうだが、高校のチームメートがライバルとなり、お互いを磨き、高めていく。埼玉栄高校OBがどれほどのスピードで番付を上げてくるのかも楽しみみのひとつだ。

サッカーW杯

先にサッカーが最も好きなスポーツと書いた。最初にトブレールからの得点で追いつき、引き分けた。日本にとってみれば大会直前に内容のある試合を展開した。私は数日後、クラマーさんが基礎を築いた日本サッカーがドイツの地で花開くのではないかと期待を抱きながらご自宅を訪れた。

クラマーさんから「日本は強くなった」とほめられると思っていたが、評価は違っていた。彼は「日本にはストライカーがほしい」を繰り返した。当時の日本代表は高原と柳沢のツートップ。ドイツ戦で高原は2点を挙げたが、クラマーさんに言わせれば、ドイツが真剣勝負していなかっただけだという。その大会で日本は2敗1分けで1次リーグ敗退。次の南アフリカ大会ではフォワード不足からトップなし布陣を選んだ岡田監督の戦術が当たって1次リーグを突破したが、2014年ブラジル大会は2敗1分けと惨敗した。

今年のロシア大会では大迫が前線で頑張ったが、継続して力を発揮したとはいえなかった。ベルギー戦で日本は2点先取したものの、逆転負け。前がかりになった相手から3点目を奪っていたら結果はどうだったか。大事な試合で点が取れるストライカーがいないのは日本サッカーの長年の課題であり、クラマーさんの言葉はいまも当てはまると思っている。